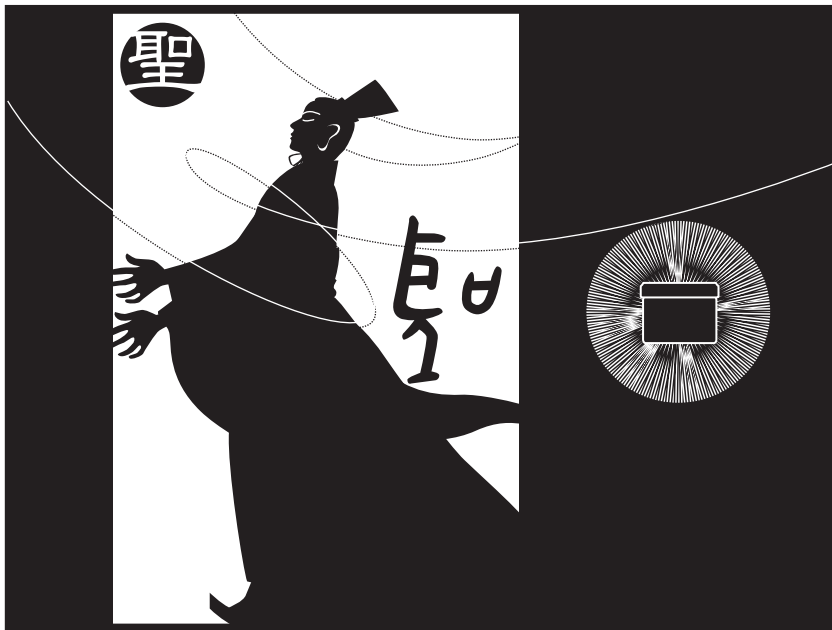


白川静のことば

《19》



金子都美絵・画

聖と俗とは、対立する概念である。神は聖であり、人は俗であるというかぎりにおいて、この対立は解けることはない。しかしこの対立は、絶対的なものではないというのが、古代人の考えかたであったのではないかと思う。

聖とは、神の声を聞くことのできるものである。『説文』考三上には、「聖は通なり」とし、呈声ていせいの字であるとするが、本来の字形は、大きな耳をもつ人の形にかかっている。𠄎さいはのちにそえられたもので、それは祈りを意味する。祈りによって神の声を聞きうるもの、それが聖者であった。風のおとずれによっても、神霊を覚知するものである。したがって聖は、神ではない。神の声を聞く、神にもっとも近い人である。

人は俗なるものであるから、神の声を聞き、神に近づくことはできない。しかし俗なるものもまた、神によつてのみ、許され、存在しうるのである。人は欲望をもつ。欲望は神の摂理に遠いものと考えられている。そのような欲望が、そのまま実現しうるはずはない。すべての欲望が満たされるはずはなく、そのような欲望にまかされた世界に、秩序はありえない。神の許すもののみが、その秩序のなかで認められる。それで人は、その欲するところを神に向かつて祈るのである。「欲する」とは、神にその実現を願うことである。

